

クラミドフィラ・フェリス（猫クラミジア）感染症とは？

- クラミドフィラ・フェリスはグラム陰性の細菌です。
- おもな標的は結膜で、感染すると結膜炎が好発します。
- 新生子猫にもっとも感染が蔓延します。
- クラミドフィラ・フェリスは宿主以外では生存することができません。感染が成立するには、猫同士での接触が必要です。
- クラミドフィラ・フェリスがズーノーシス（人獣共通感染症）となる疫学上の証拠はありません。

感染

- 猫同士の密接な接触により伝播します。感染が成立するためのもっとも重要な体液は眼分泌物です。
- 1歳齢未満の猫に多く認められます。
- 通例、クラミドフィラ・フェリスが排泄される期間は感染後約60日間ですが、持続感染が生じる可能性もあります。

臨床症状

- 潜伏期間は2～5日間です。症状は一般的に片方の眼から始まり、両眼に進行します。
- 感染当初の分泌物は水様性ですが、その後粘液または粘液膿性となります。
- 結膜浮腫はクラミドフィラ・フェリス感染症の特徴的な症状です。瞬膜の重度の充血、眼瞼痙攣、眼の不快感を伴った激しい結膜炎となります。
- 一過性の発熱、食欲不振、体重減少は感染後短期間に認められることがあります。しかし、多くの猫の健康状態は良好であり、食欲を維持し続けます。

診断

- 眼スワブを材料としてPCR検査が実施できます。検査に必要な十分量の細胞数を確保する採材テクニックが求められます。
- ワクチンを接種していない猫では、抗体検査により確定診断ができます。

疾病管理

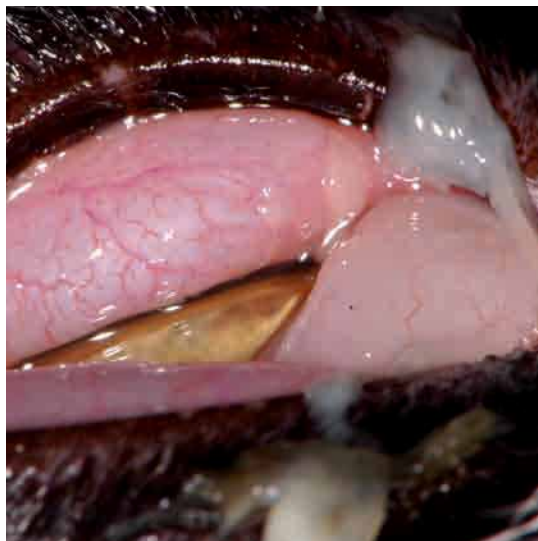
- テトラサイクリン系抗菌剤が選択されます。ドキシサイクリン（10mg/kg 経口）は1日1回の投与で済むため便利です。
- クラミドフィラ・フェリスを確実に排除するために、上記の治療を4週間は続けなければなりません。
- クラミドフィラ・フェリス感染症の拡大防止のためには、室内飼育と定期的な衛生管理が必要になります。

ワクチン接種の推奨

- クラミドフィラ・フェリス全菌体を基にした不活化および弱毒生の多価ワクチンが市販されています。
- クラミドフィラ・フェリスワクチンはノンコアワクチンです。しかし、シェルターにおいて確定診断されたクラミドフィラ・フェリス感染症の履歴があれば、ワクチン接種を考慮する必要があります。
- 長期間一緒に飼育されている猫は定期的にワクチン接種を受けるべきです。
- クラミドフィラ・フェリス感染症が蔓延している繁殖施設では、第一段階はドキシサイクリンを全頭に4週間投与する治療を行い、臨床症状がコントロールされたら、ワクチンを接種すべきです。
- ワクチン接種は一般的に8～10週齢で行い、3～4週間後に2回目の接種を行います。
- 感染リスクが続いている猫には毎年の追加（ブースター）接種が推奨されます。



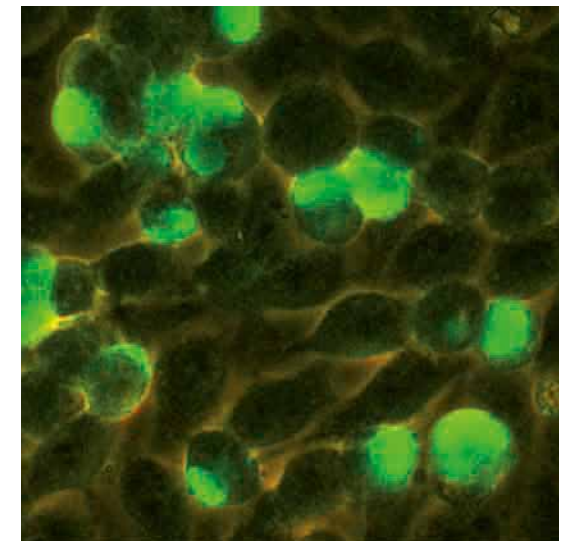
■ クラミドフィラ・フェリスに感染した猫の結膜炎



■ クラミドフィラ・フェリス感染に関連した化膿性結膜炎と眼瞼浮腫



■ クラミドフィラ・フェリス感染は、通常眼スワブによるPCR検査で診断される



■ 間接免疫蛍光法はクラミドフィラ抗体の定量に利用する